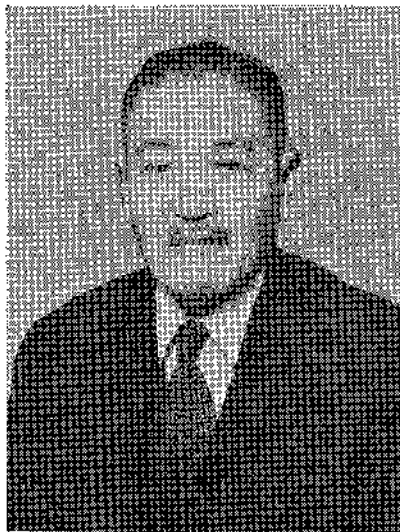




故 根 岸 会 長

4月1日夜根岸会長の訃音に接し全く非常なショックを受けた。2日前に元気な温容に接し協会の運営を色々と言われたばかりで何としても信ずることが出来ない有様だった。しかし時間が経るに従い冷厳な事実となって凡てが処理されて行く、悲しいことだ……



氏は明治42年東京蔵前高工（現東京工大）応化を主席で卒業され同年12月中野電信隊に一年志願兵として入隊し、間もなく母校の手島校長から日本ペイント社長が優秀な卒業生を1名採用したい、条件として1年以内に海外に留学させるとのことで教授会を開いた結果君を推薦したとの話でこれを快諾、除隊と同時に入社したのが塗料界に一生を託するモメントだった。入社後2年間は全く現場勤務者と同じ勤めをやりその間4、5年を経過したと海外行きの話は抹殺されていた。これは採用の嘘言であったと知り退社した。この経験から終生純真な学生に現実性の無い巧言は厳に謹み通された。退社後玉水弘氏（関ベ創立者）と東亜ペイントを起され経営に苦心されたが当時の資本家万能主義に押され氏の潔癖性はこれと同和することが出来ず、第二の夢も消え去った。同志の玉水氏と自力による経営を志し尼崎市にTN化学工業研究所を設立、彫身の努力が続けられた。その甲斐あって西宮にも分工場を建て漸やく安定する状態となると更に日本工業原料KKを起し化学薬品全般、酸素瓦斯の製造研究を続けその間各界の役員に推された。

昭和4年大日本塗料（旧、鉛粉塗料）に乞われて取締役技師長に就任、間もなく社長に推され今日に至った。

根 岸 信 氏 を 惜 む

~~~~~

### 有言実行

凡ゆる困苦と戦い最も豊富な経験者であった氏は経営者のモットーとして、「社長とか指導者は身を以て部下の議表となること、即ち責任、努力は自ら示すことです。上司としては部下に如何なる苦言、難問を要求しても部下から心からなる敬信の服従が出来るような徳望をもって慈しい。また社長自らは全従業員の内情を承知し、如何にして彼等および家族が幸福になるかを念頭に置いて処理しなければならない。また「経営者は株主、従業員、金融業者、取引先に対する奉仕上会社の将来に対する成績や方針は責任を以て実現するため有言実行を理想とします」と常に語り、更に「生産は国家的見地に立って処理しなければならない。末だ国産化されないもの又は輸出に好い条件のものを選ぶようにしなければならない」と強調してやまなかった。

国家、公共のため氏は全市の努力を惜しまず、その功を認められ昭和28年に世界的防錆塗料及び鉛白の製造法その他幾多の特許新案を得てわが国産業界の振興と文化の向上に貢献したものとて藍綬褒賞を受けられた。この受賞は業界としては濫觴の榮であった。また中小産業界の技術興揚のため末だ戦後の混乱期の25年に今村阪大元総長、小畑源之助氏の推挙により社団法人生産技術振興協会の第2代会長を受けられ爾来10年余技術振興のため第一線に立たれ事業発展に努められたことは衆知の事である。この偉人も今は無し惜しみても余りある。

◎略歴 ◎明治21年1月16日茨城県真壁郡下飯町甲366に生れ、苦学力行明治42年東京高工応化卒

◎公職 ◎関西化学工業協会常務理事、日本化学工業協会常務理事、日本経済団体連合会評議員、生産技術振興協会会長、発明協会理事、日本塗料輸出振興会社長、金属表面技術協会理事その他